はじめに—主題の受け止め方、研究の進め方—

私たちは、十人十色と言う言葉があるように、多様な人々で構成される社会の一員であり、自他の幸福を追求するために、他者の尊厳を認め、かつ良好な関係を築き、共に平和で民主的な国家・社会をつくる努力をしなければならないと考える。

平成29年3月に告示された学習指導要領総則前文は、「一人一人の児童（生徒）が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と述べ、また、幼稚園教育要領は、総則第２「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」３（６）「思考力の芽生え」において「身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。」と述べている。

公益社団法人日本教育会調査研究委員会は、これからの社会の担い手となる幼児・児童・生徒が互いの多様性を尊重し、共に生きる社会のより良き構成員となって欲しいとの願いをもって、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校・ＰＴＡに関わった学識経験者が主題・副主題に関して協議を重ねてきた。そして、その成果を各学校段階等で活用していただきたいと願っている。

多様性は福をもたらす

江戸の世、庶民は初夢を見るため宝船を描いた刷り物を枕の下に敷いたという。宝船の帆には悪夢を喰らう「獏」の文字があり、船上には七福神。そして回文歌「なかきよのとおのねぶりのみなめざめなみのりぶねのおとのよきかな」が添えられていた。人々に幸せをもたらす七福神は、多様な資質を持つ日本やインドあるいは中国の神々。米俵を踏まえる大黒天、鯛を釣りあげる恵比寿、忿怒の武将であるが財宝の神・毘沙門天、学問・芸術の守護神・弁財天、南極星の化身といわれる福禄寿、長寿を授ける寿老人、円満な福相の布袋尊。江戸の人々の願う世は、多様な人々が共に生きてゆくものであったのではないかと想像する。

「分断」を憂う

人類史において、人間は蒸気や電気というエネルギーを獲得したことにより生活上の利便性を追求し続けてきた。とりわけ通信・情報の分野での技術を手段とし、国境を超えて経済や文化などの交流が地球規模で進められている。地球という惑星において、人々は共に生きることを願ったのではないか。

２０世紀、第二次世界大戦の教訓から人々は共存・共栄を図るべく努力をしてきたのでは

ないか。

欧州連合（Ｅuropean Ｕnion）が結成され、西欧諸国のみならず南欧・東欧諸国も加入し、欧州連合２７か国体制となった。しかし、２１世紀に入ってからの世界の状況を見ると、北部アフリカや中東の政治情勢の混乱から多くの難民が欧州の地に安住の地を求めて来たことにより、ＥＵ加盟国の中で、難民受け入れをめぐる意見の対立が生じている。2016年、英国はＥＵ離脱をという国民の意思が表明され、ＥＵとの間で交渉が続けられている。一つにまとまっていたヨーロッパ世界が分断されなければ良いと思う。また、大国アメリカでは2017年以降、意見の対立に拍車がかかっている。

こうした「分断」という様相は、私たちの生活に心身の豊かさや精神の高潔さをもたらさないものであり、決して望ましいものではないと思う。

分断を乗り越え、共に生きる世界を構築するために、まず「多様性を尊重する」ことが第一歩であると考える。多様性（DIVERSITY）を認めることは、宝船の七福神のように幸福をもたらし、自他共栄を追求する様相がある。そこには、自己の主体性を保ちながら相手への尊敬と敬意を表明する行為が求められる。

世界人権宣言は、第一条に「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利について平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。」と高らかに謳っている。世界人権宣言の理念が人々に根付き、実践されることを願う。

DIVERSITY を構成する文字から Difference＝相違を認める Interest＝関心を持つ Visit＝安否を問う　Elasticity＝弾力がある　Respect＝敬意をもち　Sympathy＝共鳴する Intelligence＝知性をもって　Tender＝思いやりある行動をし、　そして Yeast＝共感的な交わりを醸すということを連想し、多様性における自他共栄の方策を考えてみた。

多様性を学ぶいくつかのエピソード

アメリカ合衆国の理念・精神は、「E　Pluribus　Unom（多くが集まってできた一つ）」という。この理念のもとアメリカに移住してきた人々がそれぞれの主体性を発揮した結果、現在のアメリカ合衆国の繁栄があるのではと思う。

ルーマニアのトランシルバニア地方にある黒の教会のザクセン人管理者は「多民族の地で相手への尊敬として、自らのアイデンティティを保ちつつ、道で会った多民族の人にその国の言語で挨拶する」と語っていた。DIVERSITY を具体的に示していると思う。

アフリカ・ザンビア共和国でスエーデン人の夫と共にバナナペーパー作りをしている日本人のエクスベリ・サトコさん夫妻は、製品に「Made in」ではなく「Made　with」と記している。共存共栄の精神を実現している姿である。

宮城県気仙沼市唐桑半島は、牡蠣の養殖場として全国的に知られていたが、2011年３月の東日本大震災により壊滅的な損害を受けた。宮城の牡蠣養殖復活支援に向け、広島県水産課の宮林豊さんから話を聞いた広島県江田島市の橘隆信さんは知り合いの漁師仲間に同行を呼びかけた。そんなとき「宮城の牡蠣の分まで販路を拡大できるチャンス、余計なことをせんでも」という声が聞こえた。橘さんはむっとして「秋の牡蠣の出荷は宮城から。その評判がいいから、あとに続く広島の牡蠣も全国の人に食べてもらえとる。これは宮城の問題ではなく、日本の牡蠣全体の危機なんじゃ」と言い返した。この言葉に背中を押され広島県内の漁師が宮城の牡蠣養殖復活のための牡蠣棚作りの応援に向かったという。

「相手良し、おのれ良し、世間良し」という三方良しを学ばせられた。

ある新聞の投書欄に寄せられた小学５年生の少女の声に耳を傾けたい。「私は聴覚障害者です。耳の聞こえない子同士で会話する時は、サインを使います。私は、人工内耳と補聴器を発明した人に感謝の気持ちでいっぱいです。でも、人工内耳や補聴器は水に弱いのです。また、話すスピードが速かったり、声が小さかったりすると、聞き取ることができません。みなさんは、発音をはっきり、口をしっかりあけて、ゆっくり話してくれますか？」。個を見つめ、個の願いを受け入れる寛容さを持ちたい。

誰もが生きづらさを感じない社会、共に生きる社会を構築するため、各学校等における多様性の尊重ということについて考えを進めていきたい。

本研究の有効性と活用について

幼稚園・こども園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の各校園種における多様な教育課題に対応するためには、それぞれの学校や園だけの取組では十分な成果を上げることはできない。特にそれぞれの学校・園において多様性を尊重する有効な取組が行われるためには、幼稚園・こども園と小学校の連携、小学校と中学校の連携、中学校と高等学校の連携は勿論のこと、それらの校園種と特別支援教育の連携が欠かせない。また、それら全ての学校・園では、保護者との連携や地域の方々との連携も必須である。

その意味で、本調査研究の活用範囲は広い。全国の各学校・園において、本研究の成果が多様性を尊重した取組のために活用されることを願う。